

## ロワにおける異邦人のフィギュール

女は……………困惑したような懇願するような視線をじっと私に向けていた。

その視線は何年もの間、私がそれに従うまでずっとつきまとって離れなかった。その瞳はこう語りかけていた。おそらく我々すべての沈黙の底にあることを。わが人生を語れよ、と。<sup>1)</sup>

ガブリエル・ロワ

真 田 桂 子

### はじめに

ガブリエル・ロワは、今世紀のカナダを代表する作家の一人である。マニトバの少数派であるフランス系の町、サン・ボニファスに生まれ、若い頃ヨーロッパに出奔しフランス、イギリスなどを彷徨した後、ケベックに移り住み生涯を過ごした。大ベストセラーとなった処女作『つかの間の幸福』*Bonheur d'occasion* (1945) から、1984年に他界するまで精力的に作品を発表し、フランス系カナダを代表するクラシックな作家としての地位を確立した。ロワの作品はいずれも平易な文章で書かれており、広汎な読者に受け入れられたが、その作品が内包する様々な側面には、多くの研究の余地が残されている。とりわけ、昨今注目されているのは、ガブリエル・ロワの作品がもつ優れて現代的な一面である。

今日、かつてないほど人の移動が激しさを増し、外国人問題、異文化との共存、そしてそもそも他者とは何かといったテーマが、切迫した問題としてクローズアップされている。しかし移民の国カナダにおいて、ガブリエル・ロワは、すでに1950年代のはじめからその作品に多くの異邦人を登場させ、それらのテーマに大きな関心を寄せていた。この小論では、まずロワにおいて「異邦人」はどのように描かれているのかを分析し、このテーマがロワの文学においてどのような意味を持つのかを考察する。さらに今日的な文脈において、それがいかなる意味に包摂されるのかを解明し、その現代性の一端を明らかにしてみたい。

## I ロワにおける異邦人

ロワの作品を一瞥すると、実に様々な異邦人が登場していることに驚かされる。外国人、移民、追放者、そして少数派に属する疎外された人々など、多様な民族に属する、様々な意味における「異邦人」を、ロワはあくことなく描きつづけた。例えば『この世の果ての庭』*Un jardin au bout du monde* (1975) には、放浪者や移民を主人公とした4つの短編が収められている。自分は遠い親戚だといって、赤の他人の家にかくまりこむ一人の放浪者の姿を描いた『ごろつきがドアをたたく』。カナダに移民としてやってきた孤独な中国人の肖像を描いた『どこへいくの、サム・リー・ウォン?』、また、カナダに入植した中央ヨーロッパの遊牧民、ウーデュー族の悲劇的な運命を描いた『ウーデューの谷』、そしてタイトルとなった『この世の果ての庭』では、夫との不仲に悩む、孤独なウクライナ出身の女性の物語が語られている。また、ロワが小学校の教師をしていた頃の思い出にもとづいて執筆された小説集『わが心の子らよ』*Ces enfants de ma vie* (1977) には、移民の子供たちの心温まるエピソードが集められている。しかしそれらの物語の背後からは、親たちの描写を通して、困難な状況におかれた移民の姿が浮かび上がってくる。さらに、ガブリエル・ロワの幼少から思春期にいたるまでを描いた自伝的な小説『デッシュンボー通り』*Rue Deschambault* (1955) においても、ロワの分身であるクリスティーヌに、消し去りがたい思い出と印象を残して去っていく、何人かの外国人の姿が描き出されている。ここですべてに言及することはできないが、このように、「異邦人」は極めて重要な位置を占め、ロワの作品に現れているのである。

ではこのような「異邦人」はロワにおいてどのように描かれているのであろうか。次に、いくつかの作品に具体的にそいながら、その特徴の一端を明らかにしてみよう。

### (1) 引き裂かれた存在 —— 孤独と連帯 ——

ロワの描いた多くの異邦人のうちでも、『どこへいくの、サム・リー・ウォン?』の主人公ほどに、孤独の影を深く刻みつけられた人物はいないであろう。誰一人寄るべのない国カナダで、サム・リー・ウォンがまず探し求めたものは、生まれ故郷の中国で見た丘陵地に似たそれであった。

ウォンが生まれたのは丘合いの村であったのだろうか。ときおり、ふうと、その丘の連なりが彼の心をよぎるように思われた。<sup>2)</sup>

身も心もバラバラになって、自分がもう存在のかげらでしかないように感じられるなか、丘の連なりだけが、自分が中国人サム・リー・ウォンであることを、再び自覚させてくれるのだった。彼が移住の地を選んだのも、遠くに丘の連なりが見えるサスカッチョワンの小さな町であった。こうして「不自由な言葉の代わりの、へりくだった微笑み」<sup>3)</sup>を貼りつけたサム・リー・ウォンは、その町で小さなレストランを開店する。おそらくその当時の大部分の中国系移民がそうしたように。こ

の町でできたサム・リー・ウォンの唯一の友人は、言語障害のある風変わりな人物スミイアだった。ピレネー山脈のふもとに生まれ流転の後にこの町にやってきたスミイアは、「もう二十年もまえから、どうしようもなく奇妙でまったく脈絡のないその話を、辛抱強く聞いてくれる仲間を探しとめていたのだった」<sup>4)</sup>。こうしてわけのわからない言葉を話す二人の間に、不可思議な友情が芽生える。

彼（ウォン）は知っているだけのありったけの言葉をつないで言った。「中国、人間多すぎる。ここ、広い。でも人間いない。ひとりぼっちの中国人、あちこちに。でも寂しいね。あの丘、大好きね。」……スミイア老人には、それだけで十分にウォンの郷愁が理解できた。なにしろ誰からも理解されないがために、猫の言葉すらわかるようになっていたのだから。<sup>5)</sup>

ウォンの店はますます繁盛し、二十数年の月日が流れる。しかし、時流に押し流されるようにして、ウォンの運命に陰りがさす。その町の地場産業が衰退してお客が減り、ウォンの店にやってきた衛生局からの視察と摘発がそれに追い討ちをかける。どうしたらよいのか途方にくれているウォンの様子に気づいたのは、スミイア老人ただ一人だけだった。何とかウォンを救おうと町の人々に彼の窮状を説明しようとするが、スミイア老人の言葉を本当に理解する者は誰一人としていない。そして、ようやく伝わったかのように思えたが、実は、ウォンがこの町を離れ故郷の中国へと帰ることになったのだと解釈されてしまう。言葉によるコミュニケーションは十分にできなくとも、控え目で働き者のウォンにかねてから好意を寄せていた町の人々は、彼の出発を惜しみながらも盛大に新しい門出を祝ってやろうとパーティを開く。しかし皮肉にも、町の人々の彼に対する好意の発露が、窮地に立たされながらもこの町に残って商売を続けようと、一抹の希望を捨てずにいたウォンに、町を離れる最終的な決心をさせるのである。ウォンは町の人々が自分の出発を望んでおり、もはやこの町にはいられないのだと思いこんでしまう。こうしてウォンは、丘のつらなりだけを心の寄りどころに、再び見知らぬ土地へと旅立つのである。

ここで私たちは、ウォンの物語のうちに、相反する二つの側面が浮き彫りにされていることに気づかされる。一つは、ウォンの姿のうちに刻みつけられた異邦人としての孤独である。言葉によるコミュニケーションを断たれ、貼りつけた笑顔によってしか、他の人々との意志の疎通をはかることができないウォンは、抗いがたい沈黙のなかに落ち込んでいく。三人称小説であるこの物語のなかで、自由間接話法<sup>6)</sup>として吐露されるウォンの心情は、誰に発せられるものでもない物悲しいモノログとして、この小説のうちに充溢している。しかしながらこの物語には、その乗り越えがたい孤独とともに、言葉の壁を越えたコミュニケーションの可能性もが同時に描き出されている。それはスミイアとの友情であり、彼らは互いに言語的なハンディを背負いながらも、深く心を通い合わせるのである。しかしこの物語では、すでに見たような、意志の疎通のすれ違いから生みだされた滑稽な悲喜劇のうちに、異邦人ウォンの孤独が浮き彫りにされ結末をむかえる。その孤独は、ウォンと彼をとりまく人々との間に流れる伝えきれなかった友情のゆえに、いっそう際立ったものと

なるのである。こうして『どこにいくの、サム・リー・ウォン?』では、孤独と連帯との間に引き裂かれ、果てしのない彷徨に生きることを運命づけられた異邦人の姿が描き出されるのである。

## (2) 普遍性への昇華 ― 移民の子供たち ―

『どこへいくの、サム・リー・ウォン?』に見られるように『この世の果ての庭』に収められた短編では、異邦人につきまとう解消しがたい孤独と差異とが、くっきりと浮き彫りにされていた。それとは対照的に、『わが心の子らよ』においては、異邦人が恵まれない環境と孤立化から抜け出して、まわりの人々との融和を実現する様が、無垢で純粋な移民の子供たちの姿をとおして描かれる。『わが心の子らよ』は、ロワの自伝的な作品の一つであり六編の小説から構成されている。全編を通し、ロワの他我を思わせるクリスティーヌが、語り手であり主人公として登場する。六編のうちの四編は、貧しい移民の子供ばかりが集まる小学校が舞台であり、教師であるクリスティーヌと様々な状況に置かれた移民の子供との心の通い合いが描かれている。

その一つ『ひばり』には、ウクライナ出身の貧しい移民の子供ニルが登場する。クリスティーヌが受け持つクラスで、いつも風変わりな服装をしてやってくる一人の少年ニルには飛び抜けた天性が備わっていた。それは歌をうたうことだった。ニルの澄んだ歌声は、聞くものに憂いを忘れさせその心を高揚させるのだった。ニルが歌うのは、きまって母親が教えてくれたウクライナの歌であった。ニルの母親は、ウクライナ語以外には移民先の言語である英語もフランス語もほとんど話すことはできなかった。

- ― ……だけどあんたの母さんはどこでその歌を習ったの。
- ― 故郷だよ。移民してくるまえの、小さかったときに。今、ウクライナのもので残っているのはそれだけだって、母さんが言うんだ。
- ― それで今度は、あんたの小さな頭のなかにそれが残るようになって、一生懸命に教えてるってわけなのね。<sup>7)</sup>

クリスティーヌは、人の心を明るく照らすニルの歌声に魅せられて、それをもっと積極的に役立てようと思いつく。まず、ニルの歌声は、無気力に陥りかけていたクリスティーヌの母親を、力強く励ますのである。その次にクリスティーヌは、ニルを病に苦しむ老人ばかりが収容されている病院に連れていき、その歌声を聞かせるのである。ニルの歌声で、無気力と無秩序のなかに沈み込んでいた老人たちのその顔は、明るく照り輝き精気に満ちてくる。最後には老人たちは歓喜して、ニルに向けて殺到しさえする。こうしてこの物語では、移民の子供ニルの姿のうちに、社会の周辺部に生きることを余儀なくされた移民が、人々に希望を与える存在にすらなりうることを暗示するのである。しかし一方で、この物語においても、移民の困難な状況と故郷を失った哀愁はしっかりと描き出されている。クリスティーヌがニルを病院から自宅へと送り届けたときにそこで目にするもの

は、例えば悪臭が立ちこめる屠殺場の近くに居をかまざるえないという、多くの移民が耐え忍んでいた恵まれない生活環境であった。しかし、この物語において強調されるのは、言葉の壁や生活環境の違いを乗り越え、異邦人である移民と住民との間に打ち立てられる一体感である。最後の場面はそのことを象徴的に表わしている。悪臭に澱んだ沼を通りすぎ花の咲き乱れる一画に出ると、そこにニルの家がありパラスコヴィア・ガライーダが子供の帰りを待っていた。

私はニルを介して、パラスコヴィア・ガライーダに、彼女の小さな息子の歌がどれだけ多くの人たちに、喜びをもたらしたかを説明しようとした。そして彼女の方もニルを通し、感謝の気持ちを伝えようとするのであった。やがて、私たちは言葉を通して気持ちを伝え合おうとするのをやめ、ただ々夜の沈黙に聞き入っていた。

母親が息子に何か合図を送ったようだった。……か細い旋律が喉の奥から流れ出た。はじめはおづおづと、だんだんと確固なものとなり、彼らは声を合わせて歌い始めた。歌声はのびやかに広がって、高らかに鳴り響いた。その歌はこの世のものであって、この世のものではないような不思議な美しさに満ちていた。

果てしなく広がる空の下で、その歌声に、心はわしづかみにされたように激しく揺さぶられ、そして解き放たれるのであった。<sup>8)</sup>

このように『ひばり』では、歌という言葉を超えた、あらゆる人間に訴えかける普遍的なものの大きさが描かれる。また『我が心の子らよ』に収められたその他の作品『デメトリオフ』においても、粗野で無教養だとまわりの人々からさげすまれるロシアからの移民のデメトリオフ一家が、末息子のカリグラフ（習字）の才能によって一家の誇りを取り戻し、人々との融和のきっかけをつかむ話が描かれる。このように『わが心の子らよ』においては、子供という無限の可能性を孕んだ存在に託されて、言葉を超えた普遍的なものが、異邦人の孤独や差異を克服し、我々と彼らとの距離を一気に消失させてしまう現実が描かれるのである。しかもそれは、異邦人の側からの一方的な同化なのではなく、互いの歩み寄りにほかならないことも示唆される。『デメトリオフ』において、デメトリオフ家のあるロシア系の移民が住む一画に、始めて足を踏み入れたクリスティーヌは次のように述懐する。

私の人生で、こんなにも遠くの見知らぬ異国に入り込んでしまったと感じたことはなかったであろう。でも、すぐに私は目が覚めた。ああ、ここでは私こそが異邦人であるのだと。<sup>9)</sup>

みすばらしい家屋が並び、世間から断絶したような、独特の雰囲気包まれたその一画において、クリスティーヌは自らにも相対的な眼差しを向けるのである。

### (3) 異邦人の光と影 ――二つの眼差しから――

このようにロワが描く異邦人の姿のうちには、相反する側面が同時に描かれていた。一つは、故郷を失った哀愁やいやしがたい孤独という、異邦人につきまとう影としての側面であった。もう一つは、その孤独と差異とが、言葉や生活習慣などの壁を乗り越え普遍的なものの中に解消され、そこに新しい融和と希望が生み出されるという、異邦人が放つ光としての側面であった。しかもそれらの側面は、常に二つの眼差しから掘り下げられていた。一つはいわば社会学的なアプローチであり、移民や、放浪者、それに社会的に疎外された人々といった、様々な意味における異邦人の状況が、その描写のうちに客観的に観察され分析されているのである。この視点は、作者であるロワ自身の、ジャーナリストとしての経験に裏打ちされたものであろう<sup>10)</sup>。さらにもう一つの眼差しは、様々な状況にある個としての異邦人の内面を、丹念に描こうとする文学的なそれである。ロワにおける異邦人の姿は、交錯するこの二つの眼差しによってくっきりと浮き彫りにされているのである。

しかし、ロワがくっきりと描き出す異邦人の姿をたどるとき、私たちは奇妙な矛盾点に到達する。それはあえて言うならば、異邦人であるという、輪郭そのものの喪失である。『わが心の子らよ』において、私たちは普遍的なものの昇華のうちに、異邦人が異邦人であることをやめ、深いところで我々との幸福な融合を実現させる情景を見た。が、それにとどまらず、異邦人の孤独と哀愁が際立つ『この世の果ての庭』の短編群においても、我々はこの奇妙な逆転を目のあたりにする。例えば『どこへいくの、サム・リー・ウォン?』において、異邦人としてのウォンの孤独は、語り手と話者との区別を曖昧なものとし、さらに読み手との距離を一気に縮める効果を持つ、「自由間接話法」によるモノローグの形で語られていた。コミュニケーションが断たれたところで吐露されたウォンの内面は、このように自由間接話法を通してまっすぐに我々の内面へと届き、異邦人ウォンの孤独は、いつしか我々自身の孤独と重なり合うのである。さらに『この世の果ての庭』においても、主人公マルタのウクライナ移民としての孤独は、夫との不仲、すなわち人間関係の齟齬という普遍的なテーマのなかに吸収されて描かれていた。このように、いずれの作品においても、異邦人としての孤独は、いつしか我々自身の孤独そのものとすりかわる。ロワにおける異邦人はこのように、その姿をたどるものを、いつしか自分自身の内面へと導くのである。

では、このように描き出される異邦人は、ロワの文学においていったいどのような意味をもつのであろうか。ここでロワにおける異邦人をさらに別の側面から検証し、この問題についての考察をすすめたい。

## Ⅱ 異邦人としての自己と他者

### (1) 自伝的な作品における異邦人<sup>11)</sup>

ロワにおける異邦人についての考察を深める上で、特に重要だと思われるのは、その自伝的な作

品にあらわれる異邦人の存在である。

『デッシャンボー通り』Rue Deschambault (1955)『わが心の子らよ』『アルタモンへの道』La Route d'Altamont (1966)は、ロワの自伝的な小説の三部作をなすものとして知られている。いずれの作品においても、ロワ自身を髣髴とさせる主人公クリスティーヌが、語り手として登場する。『わが心の子らよ』についてはすでに述べたが、三部作の一つ『デッシャンボー通り』はとりわけ自伝的な要素の濃い作品であり、ロワの育ったマニトバのサン・ボニファスを舞台に、主人公が少女から大人へと成長していく過程が描かれる。『デッシャンボー通り』は、長編小説（ロマン）とされているが、実は17のそれぞれに完結した物語からなっている。物語は別に年代順に配列されているわけでもなく、主人公クリスティーヌに「啓示を与えた特権的な瞬間」が、記憶のおもむくままに書き連ねられたような構成をとっている。

この『デッシャンボー通り』においても、異邦人は重要な意味を担いながら登場する。まずこの作品は、『二人の黒人』と題された物語によって幕をあける。小説全体の登場人物や背景を提示する役目を果たす導入部に、すでに異邦人にまつわる物語を見いだすことは注目に値する。『二人の黒人』は、間借り人を置かなければやっていけない、貧しい家庭であるクリスティーヌの一家と、その隣人であるジルベール家に、ある日住みつくことになった二人の黒人をめぐる物語である。周囲の偏見と警戒にさらされながらも、敬虔で柔和な心をもつ黒人たちが、いつしか人々の偏見を氷解させて生活のなかに溶け込んでいくさまが描かれる。それだけにとどまらず、この物語において黒人たちは、遠い異国の珍しい話を伝え、慣れきった日常を新しい光で照らし出す存在として描かれている。黒人たちは最後には、皆に惜しまれながら町を去る。『デッシャンボー通り』には、この他にも『イタリアの未亡人』や『ウィルヘルム』、『ダンレアの井戸』など、移民や外国人にまつわる物語が収められている。『イタリアの未亡人』においても、イタリアからの移民ジョゼッペとリザの夫婦が、まわりの偏見と警戒を乗り越えて人々の信頼を勝ち得ていくさまが描かれる。『二人の黒人』の場合と同様、ここでも異邦人は、遙かな異国の情景を伝え、日常に新しい秩序と活力を与える存在として描かれる。しかも彼らは、この世で希にしか出会わぬ何かをもたらすのである。クリスティーヌの母親は、ジョゼッペのリザに対する愛の深さに感嘆する。

— こんな愛情はそうそうお目にかかるものではないわ。この世で最もまれなものの一つよ。<sup>12)</sup>

物語の結末は意外にも、病身のリザをかばっていたジョゼッペが先にぼっくりと急逝し、薄幸なりザは夫の棺とともにイタリアへと帰っていく。

このように『デッシャンボー通り』においても、異邦人は陰と陽との相反する二つの側面をあわせもつ。一面において彼らは、人々に警戒と偏見を抱かせ、常に孤立と無理解のなかに陥る危険にさらされていた。しかし一方で異邦人は、ともすれば停滞化する我々の日常に、新しい何かをもたらしそれを活性化するのである。しかし注目すべきであるのは、先に検証した『どこへいくのサ

ム・リー・ウォン?』や『わが心の子らよ』のいくつかの作品においては、コミュニケーションの断絶や普遍的なものへの昇華など、そこで浮き彫りにされた異邦人の光と影は、どちらかといえば異邦人であるという事実に付帯した絶対的な条件に起因するものであったが、『デッシャンボー通り』においては、我々と彼らとの関係、すなわち「他者」としてとらえられた異邦人と我々との人間関係の視点から、異邦人の孤独や憂愁、希望や可能性が掘り下げられているという点である。『ウィルヘルム』において、この特徴は特に端的に表れていた。ウィルヘルムは、オランダからの移民であり、クリスティーヌに恋をする。しかし二人の淡い恋は周囲の強い反対にあい、成就することなく終わる。ウィルヘルムの異邦人としての哀愁は、彼を受け入れることができなかったクリスティーヌの両親の、複雑な心情の揺れのなかにもにじみ出る。ウィルヘルムがオランダへ帰ったことがわかった後、

母は、ウィルヘルムのことがある前の、もとの慈悲深くて公正な私が大好きな母に戻った。父ももうオランダ人を悪く言うことはなかった。……そして母は、ウィルヘルムが自分の国で、彼の家族に囲まれて、愛されて、彼にふさわしい扱いを受けることを望んでいる、と言った。<sup>13)</sup>

このようにロワの自伝的な小説において、異邦人は主人公クリスティーヌの成長に重要な啓示を与えた存在として登場する。すでに別の機会でも明らかにしたように<sup>14)</sup>、ロワの自伝的な小説の特徴はその独特の形式にあるといえる。自己を語る、あるいは、過去を回顧するジャンルであるはずの自伝的な小説において、ロワの場合、他者や現在がきわめて大きな意味をもっている。ロワの自伝的な小説においては、過去を迂回しながら現在が語られ、他者を迂回しながら自己が語られるのである。従って、作品全体を貫く重要なモチーフとして現れる異邦人は、ロワ自身と深く結びついた存在であると考えられるのである。

## (2) ガブリエル・ロワと異郷

ガブリエル・ロワの人生が、いかに深く、異郷の感覚にさらされたものであったかは、別の機会に詳しく論じた<sup>15)</sup>。祖先のケベックからマニトバへの移住、ロワ自身のヨーロッパへの出奔、生まれ故郷のマニトバを遠く離れてのケベックへの最終的な移住など、この作家の人生は、数多くの移住の経験にみちていた。それに加えて、マニトバの少数派であるフランス系に生まれたロワは、社会の周辺で生きることを余儀なくされた、疎外された者の悲哀をまざまざと味わった。このようにロワの人生は様々な意味における、異郷の感覚に深く刻印されていた。実際にロワは、「私はこの世で安住の地を見出したことはない」<sup>16)</sup>と告白している。さらにロワは、「自分自身の孤独を味わったものだけが、他者の孤独を直感することができるのだ。」<sup>17)</sup>と述懐するのである。このように、ロワのうちに内在する「異郷」は、他者のそれを直感しつかみ取る要因として働き、また他者のうち



に見いだされるアイデンティティの浮遊感、作家を自らのうちにある「異郷」へと向かわせるのである。ロワの異郷は、この自己から他者へ、他者から自己への浮遊のうちに描き出されることにより、独特の实在感を獲得しているのである。従って、ロワが描き出す異邦人とは、ロワの異郷が具現化されたものであり、ある意味で作家であるロワ自身の分身であると考えられるのである。

しかし、ロワが描く異邦人とは単なる作家の投影物だと、簡単に結論づけてしまうことはできないだろう。それだけにとどまらず、ロワが描く異邦人の姿には、さらに深い意味が内包されているように思われる。では次に、自己と他者についてのロワの思想に注目し、ロワにおける異邦人のテーマについてさらに考察をすすめたい。

### (3) ロワにおける自己と他者の弁証法

作家自身がそれを認めているように<sup>18)</sup>、ガブリエル・ロワはその作品を通し、何よりも人間と人間との関係を考察しつづけた。人間と人間との関係とは、つきつめれば「自己」と「他者」の関係にはかならない。ロワはデビュー作『つかの間の幸福』によって華々しい成功をおさめ、一気に文壇の中枢へと躍り出る。それはモントリオールを舞台とし、急激な近代化と大戦前後の不穏な空気のなか、段々と疎外されていく人間を写實的に描いた社会派の小説であった。しかし、その成功の後一転して作風を転じ、故郷のマニトバを舞台にした、私的で自伝的な小説を次々と発表していくのである。遺作となった自伝『絶望と魅惑』*La détresse et l'enchantement* (1984) に至るまで、ロワはその作品を通し「自己」を凝視しつづけた。しかし、この作家にとって「自己」を凝視することは、「他者」を、あるいは「他者」との関係を凝視することにはかならなかったのではないだろうか。その作品に登場する数多くの「他者」の存在は、そのことを雄弁に物語っているだろう。

しかしロワにとって「他者」とは一体何であったのか？ 今世紀、「他者」に関して深い考察を繰り広げたエマニュエル・レヴィナスは次のように言う。他者とは、「永遠に逃れ去るもの」<sup>19)</sup>であり、「他者を所有し、把握し、認識しうるなどというのであれば、それは他者というものではないの」<sup>20)</sup>だ。他者との関係は、本質的に非相互的であり、非対照的なものとならざるを得ないのである。そしてロワにおける「他者」とはまさに、レヴィナスが記述する、「他者とその本質において担っている他者性」<sup>21)</sup>の経験ではなかっただろうか。他者との不条理で疎外にみちた関係こそが、ロワの孤独の、異郷の、中枢に位置していたものではなかろうか。

しかしながら、他者との関係に苦しみ辛酸を舐めながら、ロワはもう一方で、他者に向き合い、他者を志向しつづけた。ロワは言う。「孤独と連帯、この二つの言葉は人間の条件を言い表す、最も根本的な言葉である。」<sup>22)</sup>孤独と連帯、他者との関係におけるこの二つの極をめぐるガブリエル・ロワは揺れ続けた。ロワの自伝的な小説の一つである『アルタモンへの道』には、様々なしがらみを振り切ってヨーロッパへ旅立とうとする娘と残されることになる母親との、複雑で微妙な心理の交錯が描かれている。その中に、母と娘が人間の関係について話し合う場面がある。クリスティーンは母親のエヴリーヌから、放浪癖のある祖父との結婚によりひどく苦勞した祖母の話を聞いた後、

—ああ、もし本当に、愛や結婚が母さんが今話してくれたようなものなら、それはむしろ人間を貧しくしてしまうもののように思えるわ。

—貧しくする！ と母さんは叫んだ。結局、おまえは、今、私がおまえに言って聞かせようとしたことを、ちっとも理解していなかったんだね。貧しくするどころか反対に、他人を愛するからこそ、人は自分自身の殻を破ることができるんだよ。<sup>23)</sup>

しかし母親のこの言葉に対し、クリスティーヌはモノローグの中で次のように反論する。

—たとえ母さんが言うように、愛と束縛がどんなに私たちを成長させてくれるとしても、孤独だけが人に安らぎを与えてくれるものだとしみじみ思うわ……………。<sup>24)</sup>

クリスティーヌとエヴリーヌの言葉は、どちらもロワ自身のものであるように思われる。ここから、他者との関係をめぐる、ロワの複雑な意識を読み取ることができるだろう。このようにロワは、自己と他者との、孤独と連帯との間で引き裂かれ揺れ動くのである。

レヴィナスは「他者」を考える過程において、人間の「孤独」についても深い考察をめぐらせている。レヴィナスは、孤独を存在の本質的な条件であるととらえ、その存在論的な性質を強調する。孤独とは、「私が実在するということが、絶対的に自動詞的な要素を、つまり、志向性や関係性をもたない何ものかを構成する」<sup>25)</sup>という事実起因する。従って、この自動詞的な孤独の苦しみを抜け出すためには、他者を志向しなければならない。しかしすでに見たように、他者との関係はその「他者性」のゆえに、しばしば矛盾と不合理に満ち、幸福な融合には至りえないのである。しかし、たとえそれが「つかの間の幸福」に過ぎないとしても、孤独という自我のモナド（単子）を抜け出すためには、他者を志向する以外に道は残されてはいないのである。ここに、我々すべてに通ずる人間関係のパラドクスが存在する。ガブリエル・ロワは、このような人間関係のパラドクスを、言い換えるなら、矛盾と逆説にみちた、自己と他者の弁証法を深く生き、考え抜いた作家だと言えるのではないだろうか。

### Ⅲ まとめ — 人間の条件としての異邦 —

このようにロワの思想をたどるとき、ロワの描く異邦人の姿にはいくつもの重複した意味が隠されているように思われる。異邦人の姿から立ち上る孤独や憂愁、希望や喜びの一つ一つは、すなわち彼らが生きるその“異郷”の風景は、ロワ自身のものであり、作家自身の人生が投影されたものであった。また、異邦人はある意味で、ロワにとっての他者それ自体を、ロワを異郷の感覚に投げ入れる「他者性」それ自体を具現するものでもあったであろう。レヴィナスが「他者とは逃れ去るものである」というように、ロワにおける異邦人は、みなとどまることなく立ち去るのである。しかし、それにもまして、ロワにおける異邦人とは、孤独と連帯に引き裂かれながら生きていかざる

を得ない我々の条件を、普遍的な人間の姿を表しているのではないだろうか。

ロワが描いた異邦人の哀愁と嬉悦、その光と影は、様々な意味の「他者性」にとりまかれ互いに孤独に陥りながらも、困難な連帯を求め続けようとする現代人の姿と深いところで重なり合う。サム・リー・ウォンやニルや、そのほかのロワが描き出す異邦人のフィギュールは、従って、我々の心の中で変容し、増幅し、新たな生命を吹き込まれ生き続けるのである。

### 注

- 1) Roy, Gabrielle., *Un jardin au bout du monde*, Montréal, Boréal, 1994, p. 8.  
日本語訳は筆者による。以下, Gabrielle Roy の作品からの引用の日本語訳はすべて筆者による。
- 2) *Ibid.*, p. 49.
- 3) *Ibid.*, p. 56.
- 4) *Ibid.*, p. 59.
- 5) *Ibid.*, p. 62.
- 6) 直接話法と間接話法の中間的性質を持つ話法。作中人物の言葉や考えを表わすのに、間接話法に必要な接続詞を略し、多くは導入動詞をも略して独立節の形を与え、間接話法と同じ人称・法・時制を用いたもの。(朝倉李雄著『フランス文法事典』白水社, 1955年)。
- 7) Roy, Gabrielle., *Ces enfants de ma vie*, Montréal Boréal, 1993, p. 43.
- 8) *Ibid.*, p. 52.
- 9) *Ibid.*, p. 64.
- 10) ガブリエル・ロワは1939年から1945年まで、ジャーナリストとして活躍した。その間、カナダに在住する様々な民族からなる移民のグループに関心を寄せ、多くのルポルタージュを発表した。エッセイ集 *Fragiles lumières de la terre* 1978 には、そのいくつかが収められている。ロワのいくつかの小説には、この頃の経験が反映していると思われる。さらに注目すべきであるのは、ロワの父親は、カナダに入植する移民の世話をする移民局に勤務していた。ロワは、この父親から移民にまつわる話を聞かされながら育った。この父親の存在も、後年のロワの文学に大きな影響を与えたと思われる。
- 11) この章の内容に関しては、以前に発表した論考の一部と重複する箇所がある。
- 12) Roy, Gabrielle., *Rue Deschambault*, Montréal Boréal, 1993, p. 191.
- 13) *Ibid.*, p. 205.
- 14) 拙論「ガブリエル・ロワにおける異邦—80年代以降のケベック文学の動きに照らして—」『カナダ研究年報』15号, 1995年参照。
- 15) 同上論文, 参照。
- 16) Piccione, M-L et d'autres, *Un pays, une voix, Gabrielle Roy*, Bordeaux, M. S. H. A. 1991, p. 22.
- 17) Roy, Gabrielle., *Fragiles lumières de la terre*, Montréal, Stanké, 1982, p. 204.
- 18) 1980年, ロワはジュデイス・ジャスミンとのインタビューに応じて、自分の文学においては、人間と人間との関係を描くことが最も重要な課題の一つであると述べている。
- 19) エマニュエル・レヴィナス『時間と他者』法政大学出版会, 1986年, 85ページ。
- 20) 同上書, 92ページ。
- 21) 同上書, 88ページ。
- 22) Roy, Gabrielle., *op. cit.*, 1982, p. 230.
- 23) Roy, Gabrielle., *La Route d'Altamont*, Montréal, Stanké, 1985, pp. 228-229.
- 24) *Ibid.*, pp. 229-230.
- 25) レヴィナス, 前掲書, 8 ページ。

### 〈付 記〉

この研究は、1996年度のカナダ出版研究助成金の援助を受けて行なわれた。記して感謝の意を表わしたい。

(1996年12月25日受理)